文化財保護課

議案第２号

倉敷市指定重要文化財の諮問について

このことについて，次のとおり議決を求める。

令和２年１月２３日提出

倉敷市教育委員会

教育長　井　上　正　義

諮問する文化財

１	名　　称	単鳳環頭大刀柄頭
２	種　　類	考古資料
３	員　　数	２点
４	所在の場所	倉敷市真備町箭田３６５０
５	所有者の氏名及び住所	宗教法人　吉備寺　　代表役員　杉岡正規 倉敷市真備町箭田３６５０
６	品質及び形状	《柄頭１》鋳造品（銅，鉛，ヒ素の合金）。環帯部表面は金鍍金。 《柄頭２》鋳造品（銅，鉛の合金）。環帯部表面は金鍍金。
７	寸法又は重量	《柄頭１》環帯部幅 6.8 cm・高さ 5.1 cm，茎幅 1.8 cm・長さ 2.1 cm，重量 121.6 g 《柄頭２》環帯部幅 6.3 cm・高さ 4.7 cm，茎幅 2.2 cm・長さ 2.7 cm，重量99.8 g
８	指定の理由	当該資料は，岡山県三大巨石墳の一つに数えられる国指定史跡箭田大塚古墳から出土したもので，６世紀後葉の下道郡において，中央政権と直接的に結びついた有力者の存在を窺わせる数少ない考古資料の一つでる。いずれも柄頭のみの資料ではあるが，岡山県内では他に３点が知られているのみであり，当時の金工技術や生産体制を考えるうえで，貴重かつ重要な考古資料と評価できる。

箭田大塚古墳出土環頭大刀柄頭に関する調書

令和元年 12 月 24 日

調査者　倉敷市文化財保護審議会委員　澤田秀実
調査協力　島根県立松江北高等学校教諭　大谷晃二

1．対　象

倉敷市真備町箭田　吉備寺所蔵　箭田大塚古墳出土　単鳳環頭大刀柄頭　２点

2．内　容（図１）

単鳳環頭大刀柄頭１　全長 7.21cm、環帯部幅 6.76cm、同高さ 5.14cm、同厚さ 1.05cm、茎幅 1.83cm、同長さ 2.07cm、同厚さ 0.40～0.95cm、重さ 121.6ｇ。

環帯部はほぼ完存するが、鍍金が所々剥げで地金が露出し、片面はほぼ錆に覆われている。銅、鉛、ヒ素の合金による鋳造品。環帯表面はアマルガム法による金鍍金。中国華中～華南産原材料を使用。

単鳳環頭大刀柄頭２　全長 7.40cm、環帯部幅 6.34cm、同高さ 4.74cm、同厚さ 1.08cm、茎幅 2.15cm、同長さ 2.66cm、同厚さ 0.64～0.99cm、重さ 99.8ｇ。

茎の端部に欠損があるが、環帯部は完存し、概ね鍍金に覆われている。銅、鉛の合金による鋳造品。環帯表面はアマルガム法による金鍍金。国産ないし朝鮮半島産原材料を使用。

3．出土古墳の概要と出土時の状況

箭田大塚古墳は、倉敷市真備町箭田に所在し、1901（明治 34）年の発掘調査によって当該品２点を含む副葬品が出土した。この頃に現地調査をおこなった八木装三郎らによって古墳の外形観察や横穴式石室の略測がなされ、『備中国吉備郡笹田邸大塚記録』に遺物の出土位置、出土遺物の解説などとあわせて記載されている。その後、1929（昭和４）年に史跡に指定されたが、1981（昭和 56）年の岡山県史編纂事業による石室の実測、吉備寺所蔵の出土遺物の実測や、1983（昭和 58）年の旧真備町教育委員会による墳丘の測量調査、範囲確認発掘調査が行われるまで、墳丘、石室の形態や規模、副葬品、埴輪など基礎的な資料の整備に欠け、築造時期など詳細が不明であった。

当該の単鳳環頭大刀柄頭２点は、『備中国吉備郡笹田邸大塚記録』に付された八木による「古墳発見品説明書」（1901（明治 34）年９月記）に「剣頭柄　玉含単鳳形　貳」（註）との記載があり、その後、どのような経緯で吉備寺が所蔵するようになったのかはわからないが、1901（明治 34）年の発掘調査で出土したものであり、他の副葬品類とあわせ箭田大塚古墳から出土したことは間違いない。なお、この時に出土した副葬品のうち玉類、目釘などの一部は東京国立博物館が所蔵している。

また、今日までに判明している箭田大塚古墳の概要は以下のとおりで、これらから６世紀後半代の築造が考えられている。

・**墳　丘**　造り出し付き円墳。径48m、高さ9.5m。張り出し部長10～15m、同幅5～6m。
・**石　室**　横穴式石室、両袖式。全長19.1m。玄室長8.4m、同幅3m、同高3.5～3.9m。羨道長10.7m、同幅2.2m、同高2.4m。
・**埋葬施設**　横穴式石室玄室内の組み合わせ式石棺3基。
・**副葬品**　単鳳環頭大刀2、鉄鏃、杏葉、鞍金具、辻金具、耳環、玉類、須恵器、土師器など。
・**その他**　円筒埴輪、人物埴輪。

4．単鳳環頭大刀柄頭の概要と製作年代

環頭1　中心飾の鳳凰像は、目・眉毛、くちばしなどが立体的で丁寧に表現されている。冠毛も板状ではなく、斜めに面取りするなど立体的に表現されている。環部には、2匹の龍が交差して互いの腰を噛みあっている構図の「喰合型」である。環部走龍文は、その足の爪・指もしっかりと立体的に表現される。こうした特徴は、新納泉の編年（新納1982）のⅢ式（540～550年頃）ないしⅣ式（550～560年頃）にあたる（図5）。

環頭1の特徴は、他の単鳳環頭に比べて、環部の走龍文の立体表現に特に凹凸が著しいことである（図2）。この凹凸の著しさは、箭田大塚環頭2にも見られ、両者は中心飾の鳳凰像に違いがあるものの、環部表現の類似性がみられる。こうした点は、箭田大塚古墳の単鳳環頭1と2が、環頭大刀の工人の同一性、または模倣の問題など、金工品製作の検討する上で興味深い事例であることを示している。

環頭2　中心飾の鳳凰像は、目・眉毛・耳・顎までが分厚い板状の同じ面に表現される。冠毛は、これらとは明確に段違いで板状に表現される。その目や耳は線刻で表現され、簡略化されている。環部には、2匹の龍が交差して互いの腰を噛みあっている構図の「喰合型」である。環部走龍文は、その足の爪・指もしっかりと立体的に表現され、腿にはC字の鑿でウロコが表現されている。こうした特徴は、新納泉の編年のⅣ式（550～560年頃）にあたる（図5）。先の箭田大塚の環頭1に比べて、中心飾の表現に簡略化が見られるため、環頭1よりもやや新しいと考えられる。

この資料のように、中心飾の鳳凰像を分厚い板状に表現するものは、箭田大塚様式と呼ばれ（大谷2006）（図3）、その類例には、大阪府東大阪市山畑48号墳、長野県下伊那郡阿南町上栗田古墳、天理参考館蔵、伝岩手県盛岡市付近「亀岡」出土（本山考古室旧蔵・現在所在不明）など、5例ある（図4）。

5．資料の性格

装飾大刀は古墳時代後期を中心に盛行する副葬品であり、本来は柄頭だけでなく柄、鍔、鞘、鞘尻まで金銅ないし銀の装飾で覆われるなど、大刀全体に装飾が施されている。これらの装飾は実用性に乏しく、所有者の位階、職掌を反映するとの見解が示され、基本的には中央政権と深い関わりをもつ有力者の所有物だと考えられている。

その中で当該資料が属す単龍・単鳳環頭大刀は、百済武寧王（523年没）陵出土の単龍環頭大刀を祖形に、6世紀中葉以降、朝鮮半島からの舶載されたものと日本列島において製作されたものが

ある。6世紀後葉ないし6世紀後葉末には日本列島での生産を終え、双龍環頭大刀にかわっていく。この間の生産品で、これまでに出土した単龍・単鳳環頭大刀はおよそ150例であるが、岡山県内での確実な出土例は5点に過ぎない。これらは赤磐市岩田14号墳2点、総社市こうもり塚古墳1点に箭田大塚古墳から出土した当該資料2点であり、古代山陽道に沿って展開した有力者の存在の示す格好の研究資料となっている。とりわけ箭田大塚古墳は6世紀後葉に高梁川以西、小田川流域の下道郡で権勢をふるった有力者を葬った墳墓であり、のちの律令政府に登用される吉備真備の出身母体の萌芽すら想定させる象徴的な存在感をもっている。

また古墳時代後期の金工品としてみた場合でも、特に環頭2は分厚い板状の表現をもつ特徴的なデザインであり、酷似した一群の資料とともに、単龍・単鳳環頭大刀の生産体制を考えるうえで、極めて貴重な存在だと考えられる。

このように箭田大塚古墳から出土した単鳳環頭大刀2点は、いずれも柄頭のみの遺存で大刀全体の装飾が不明と言わざるを得ないものの、単鳳柄頭のみであっても6世紀後葉に下道郡において中央政権と直接的に結びついた有力者の存在を窺わせる数少ない考古資料の一つである。また往時の金工技術や生産体制を考えるうえで重要な考古資料であり、倉敷市内で展開した古代史とともに古墳時代の金工技術を探るうえで貴重かつ重要な考古資料だと評価できる。

（註）　『岡山県史』には「単龍環状柄頭二と単鳳環状柄頭一」（葛原ほか 1986:p.381）とあり、あわせて3点の出土を記述するが、『備中国吉備郡笹田邸大塚記録』に付された「古墳発見品説明書」からは3点目の環頭柄頭の存在は読みとれない。また、史跡に指定された直後の文献（遠山 1930）での記述や遺物そのものも確認できないことから、県史の記述に錯誤がみられる。

引用参考文献

大谷晃二　2006　「龍鳳文環頭大刀研究の覚え書き」『大阪府立近つ飛鳥博物館 2004年度共同研究成果報告書』大阪府立近つ飛鳥博物館

葛原克人　1986　「箭田大塚」『岡山県史』第18巻　考古資料　岡山県

遠山荒次　1930　「吉備郡箭田村の大塚」『吉備考古』第4号　岡山考古會

中野雅美編　1984　『箭田大塚古墳』真備町教育委員会

新納　泉　1982　「単龍・単鳳環頭大刀の編年」『史林』第65巻第4号　史学研究会

新納　泉　1984　「関東地方における前方後円墳の終末年代」『日本古代文化研究』創刊号　日本古代文化研究会

図１

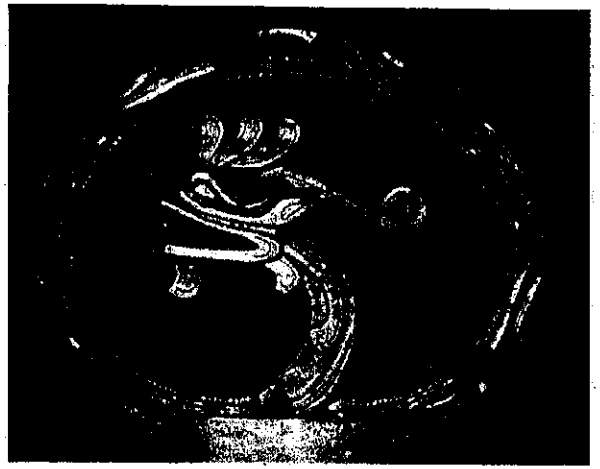
単鳳環頭大刀柄頭１（表）

単鳳環頭大刀柄頭１（裏）

単鳳環頭大刀柄頭２（表）

単鳳環頭大刀柄頭２（裏）

図２ 単環部の走龍文が喰合式の単鳳環頭の事例



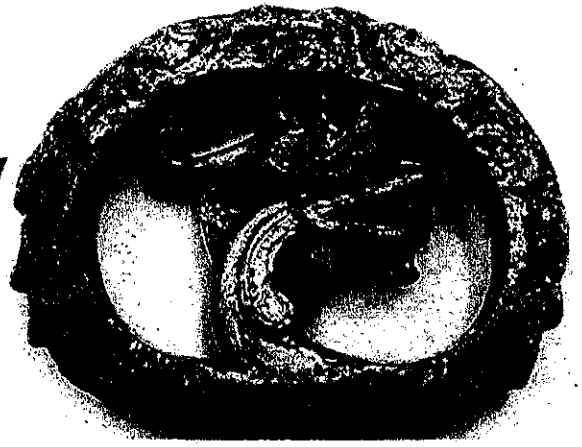
群馬県安坪3号墳（大谷撮影）

広島県釜屋1号墳（福山市撮影）

茨城県八龍神古墳（東博HP）

箭田大塚の1と2は、ともに環帯部の文様の凹凸表現が目立ち、他の単鳳環頭と比べてもその凹凸表現がよく似ている。

福岡県日拝塚古墳（図録より）



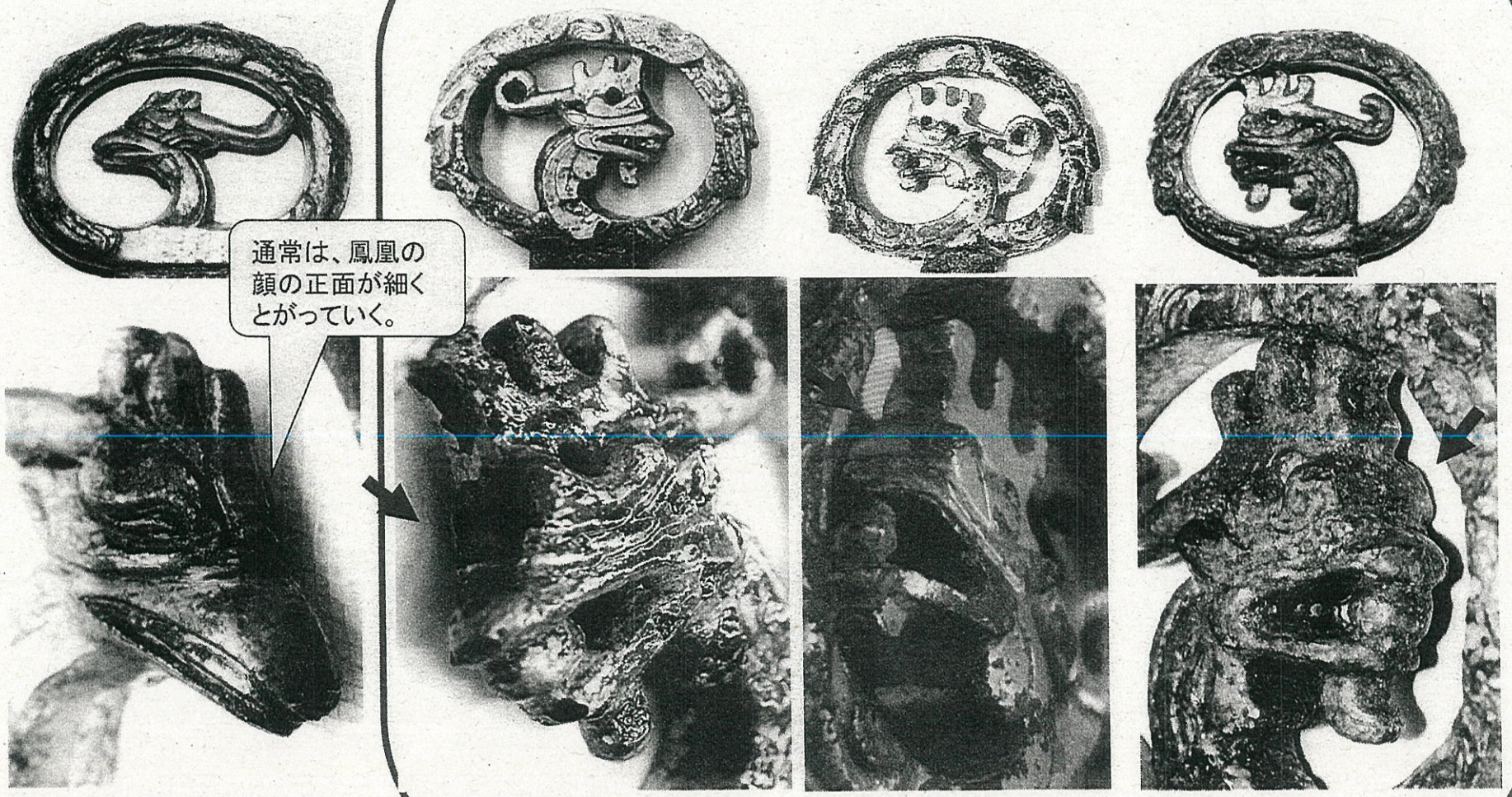
岡山県箭田大塚古墳1（澤田撮影）

岡山県箭田大塚古墳2（澤田撮影）

図3 箭田大塚様式の特徴

箭田大塚様式は、鳳凰の顔の正面が平で、分厚い板に目、眉毛、口が表現されている。（→部分）

通常は、鳳凰の顔の正面が細くとがっていく。



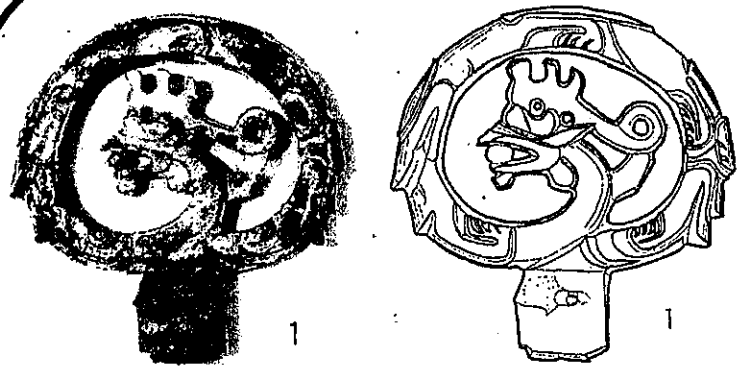
千葉県翁作古墳（大谷撮影）

岡山県箭田大塚古墳２（澤田撮影）

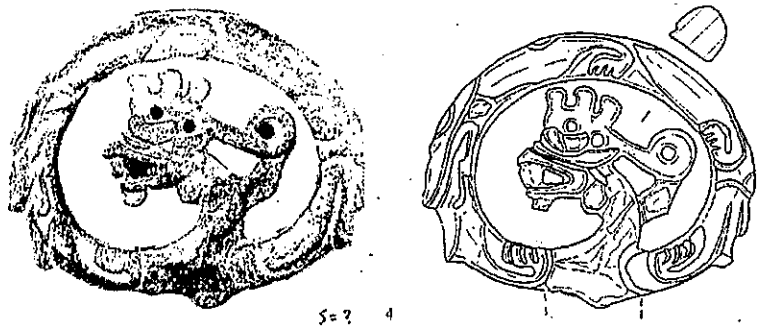
天理参考館蔵（上・紀要より、下・大谷撮影）

大阪府山畑48号墳（大谷撮影）

箭田大塚様式

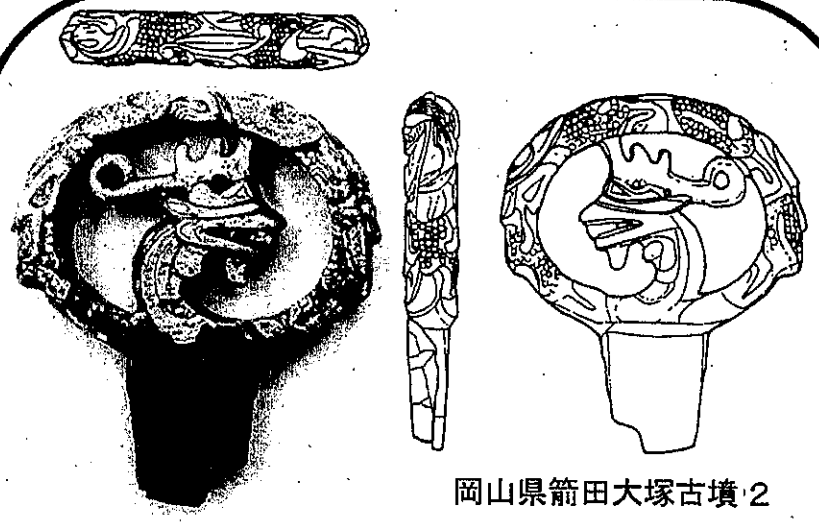


出土地不明（天理参考館蔵）

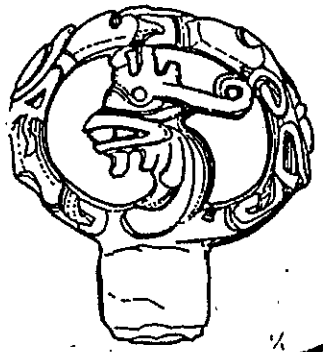


長野県上栗田古墳（『長野縣史』）

A 群



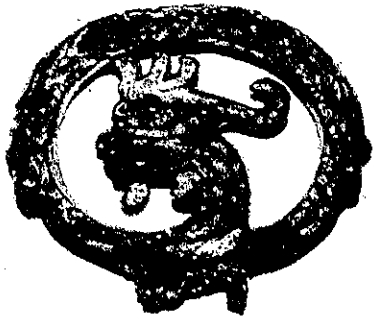
岡山県箭田大塚古墳 2



B 群

伝岩手県盛岡市出土

C 群



大阪府山畑48号墳
（大谷撮影）

図4 鳳凰像の分厚い板状表現

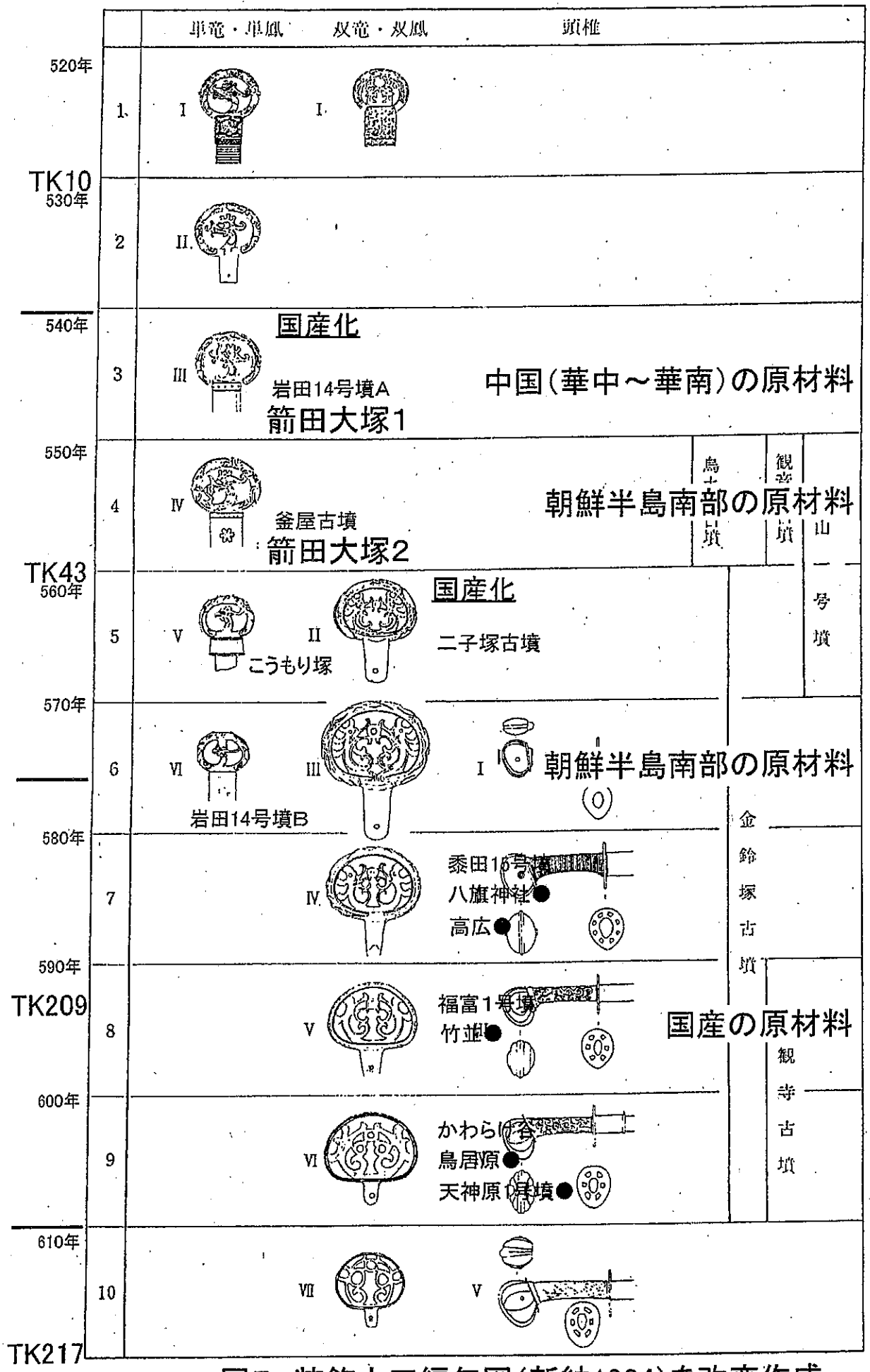


図5 装飾大刀編年図(新納1984)を改変作成